[11]文學研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2557077>

出版情報：文學研究. 11, 1935-04-10. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

雜錄

日本漢字學史

岡井慎吾博士のこの著成る、待つこと久しかりしものなり。當に出づべくして未だ一部の類書だに無かりしは、以てその著述の難きを證するものなるか。茲に漸く刊行せらるる時のおそき憾こそあれ、著者にしてその人を得たる誠に至當なるを覺ゆ。この類初出唯一の著述なりといふそれのみにても本書の價值こよなきを認むべく、通覽再讀愈その秀でたるを知り得べし。漢字渡りてより今に至る歴史をかかる書に纏めらるるに、推敲による珠玉の稿捨てられたる尙多からむを惜しむ。學未だその緒にも就かぬ門外者流の非才、この高著を云爲するをまづ畏る。

初に緒言あり次いで本文全卷を三篇に分たる、漢字傳來の當初より承平の頃までを上世とし徳川幕府成りてより現代に至るを近世としその間を中世とせらる。前をこの二期に劃するは一見大きに失するやうなるが實は然らず、上世を終るに承平の末を以てせるは、眞假名表記になる倭名抄の出でしは即ち承平の頃にして以後の文献概ね注するに略體假名を以てせる故なりと説かる。これ至言にしてこの時代の區劃たる、從來のいづれにも患はされぬ所斷これ切えたり。各篇その初に當該時代の漢字學を中心とする概

説あり、よくその時代文化等と聯關して明快に述べらる。日本漢字學を繞る概史を知らんとせばこの三篇の概説を通讀するにて大體を察するに足らざるなし。各説は各篇に分たれ通じてはすべて一一五項を數ふ、假りに夫々の分量を比ぶれば上世中世に略々相同じく近世にてはそれに倍せり。項目を概觀するに、上世は諸事項主たり中世は書籍を中心に述べ近世は小學書の刊行と諸學者とその著とを論じて時代の狀況を説かる。この態度そのまま各時代の概狀をおほよそかがはしむるに足るべきものなるが如し。これらは本書の輪廓に就いてなり。

上世の篇には早く漢字學と上古の文化との相關狀態を觀らる。漢字の傳來に始まり倭名抄に終ると雖も自ら時代に差見ゆるは、内容同じかるべきを題して一は漢語抄と呼び一は倭名抄と稱するに奈良朝と平安朝との別あるを認むべしなどの説拜聽に餘あり。説きては漢字のみの狭きに失せず假名の發生及びヲコト點のことにまで及ぼされたる、全く周くして到れり。中世に移れば上世の學究的なるに對して一般に啓蒙的なる著し、倭名抄と色葉字類抄と、東宮切韻と童蒙頌韻と、秘府略と世俗諺文と、これらの對立にても一斑を察し得。而も中世とても後期に入るや音義通俗字書類簇出の傾向を示せり。かくの如きはこの篇に指摘せられたる通見なるが、茲には訓點物の類をも擧げて漢字に對する時代思潮等をうかがはれ國語に訓ずる場合の例をも洩らされぬは特に注意すべきならん。近世にては在來の國語學史の類と相伴ふこと少からねど、本書自らその態度異なるを認めらる。諸種の刊行小學書及

び傳寫本等を適宜に分類し、應接に違なきに近きうちより注目すべきを採りて猶驚くべく多き書を一々親しく説き評せられ、また諸學者を擧げてその著述を論ぜられたり。明治以降の一般時潮とは逆行せる眞摯なる諸研究は勿論、現代の今日に至る著作論評にまで及ぼさる。研究の多端にして茫洋たるに近きままに捨ておかれたるが如き近世斯學の狀態も、互細に亘りて而も簡明に説き去られ今にして漸く雲を拂ふの感あり。博く學んで深く識られたる全く畏るのみ。

全卷不要冗長なる文字一として存する無きはさりながら、我等が祖先如何にして漢字を受入れ學び或は消化し且又研究もし來りたるかをよく闡明せられあり。各解説の簡短にして要を得、而も單なる書目解題の類とは縁無きなるを觀よ。尤も所見を異にするものいさか存すれども、そは漢字學の歴史よりは傍系に屬するにすぎず。讀み去り讀み來り唯諾々として教へらるゝこと多きのみ。さるにても書後に「序文や目次を摘記してその書の内容として片附けて居る者を往々にして見る時の平素の不滿が」重要な記載書に對する批評がましき語となりしと辯ぜられては世の多くの著者一言も無かるべく、この著を「村學究の片手間」に成ると申さるるには自らの怠惰に我ら何を以てか責めん。その學よく和漢に通じ給ふ、先生にして初てこの著出づ。漢字傳はりて攸久一千數百年、斯學漸く明かとなる、即ち喜び盡きざるままにこの拙筆を執ると云。

(平井秀文)

幕末歌壇の研究

本書は著者森敬三氏がその緒言に述べてみられるやうに、既に諸雜誌で發表せられた論文をそのまゝ、纏めてこの一卷とし上梓せられたものである。从つて載する十二篇すべて新しく世に問はれる研究ではないが、廣くは讀まれぬ雜誌に見えたのもあり又かく纏まつては幕末歌壇の狀態を通じて知る便もあつて、本書刊行の意義は認められその價值も存する。

初の三篇は總括的なもので殊に冒頭の「幕末歌壇の諸相」は總論に當る、次いで當時歌壇の思想的特質を説かれては「幕末歌壇にあらはれたる日本精神」がある、又從來も個々に就いては研究せられてゐたがそれらに關するものを一括し且つ當時の歌壇に於ける地位を論ぜられた「幕末歌壇における萬葉調歌人」が見える、擧げられてゐる人々は既に認められてはゐるが所説よく彼等の地位を明かにし總括の目的も果されてゐる。この三篇は廣く觀ての論であるが以下九篇は各個人を詳説せられたもので即ち、諸平・翁磨・幸典・光平・文雄・幽眞・千廣・定沌・芳樹に及び夫々研究と題する。既知のことは勿論新しく知られたことなどもなを行交巧に記され、全篇興深く讀むに飽かず、要するに斯界に貴き勞作と言ひ得よう。

(平井秀文)

『大伴家持の研究』 古瀬 確 著

古瀬氏自身この書の緒言に言つてゐるやうに、大伴家持の研究は萬葉集に關する大きな問題の解明を意味する。何となれば、彼は萬葉集後期の作風を代表する人で、かつ古來、集の撰者だと言はれてゐる人だから。さてこの書は家持及び彼を繞るそれらのあらゆる問題を全面的に取上げて剩す所がない。第一章では「人としての家持」に就てその生涯を敘述し周囲の人々を見、専ら彼に於ける藝術活動の可能性を探求してゐる。そして第二章で「歌人としての家持」を論じ、傳統と環境との中であつて彼がどんな歌人となつたかを述べる。即ち、始めに萬葉集の歌を敘情詩・敘景詩・敘事詩の三つに大別して各々の作風の變遷を大觀し、それによつて家持の歌の特質を浮び上らせようとする。次ぎに表現形式や素材などの調査によつて古今集への歴史的なつながりを見、最後に彼の作家的成長を跡づけて、「天平感寶五年二月二十三日興に依つて作つたと云ふ（中略）二首の如きは靜寂な自然の中から微かな息衝をも見逃さず捕へてゐるものと言ふべく、彼の希求した繊細優美なる歌境の頂點に立つものであつて、人麿に於ける雄大莊重な匂もなく、赤人に見える清朗透徹の趣もないけれども、赤人によつて純客觀化せられた敘景詩の上に再び主觀を投影する事によつてよく細かな麗しい世界を展開する事の出來たのは彼に於ける著しい成功と言ふべきである。」と言ふ。これは全く至言である。第三章は「家持と萬葉集」で、こゝでは兩者の關係を論證確

定しようとする根據の探求に努めてゐる。

著者は我が九州帝大法文學部出身の萬葉集專攻學徒である。蘊蓄を傾けたこの書の所説は實證的で穩健であり、然かも行文平明で一般の讀者としても適切な興趣に富んでゐる。（東京・青々館發行、定價貳圓）（笹月清美）

『義經傳説と文學』 島津 久 著

義經の傳説と文學とに關する資料は夥しい數に上る。この書はそれらの資料を縱横に驅使し、のみならず書誌學的に詳しく説明してゐる。その丹念な記述はこの書の一特質であるが、重要なのは研究の方法と組織とである。又、史實と傳説と文學との本質が如何に把握され、その相互關係が如何に認識されてゐるかである。

それらの點は、初めに著者がその意圖として述べてゐる次の言葉で最もよく説明することが出来る。即ち、武勇傳説の論究に當つては、「先づ我が國の武勇傳説を代表し得べき中心人物を覺めて、その周圍に結びつけられてゐる諸傳説に就いて考察を加へるのが、最も緊要で且有意義な勞作であると考へるのである。その爲に準備として、我が國に於ける武勇傳説の展開の跡を一通り眺めて觀たいし、そしてその中からその中心人物を檢出して何故に武勇傳説の中心人物となるに至つたかを討ね、その人物を主人公とする數々の傳説の發生・成形・進展・擴布・轉化等の諸現象を精査し、そしてその傳説に反映してゐる國民的或は時代的若しく

は地方的等の特質或は著色を吟味して、民衆と傳説との相互的影響感化について究明を試み、他面では、各傳説がどんな文學を生んだか、作品の素材としてどういふ取扱はれ方を受けてゐるか、作品化せられた後に於て如何なる姿に成長變容を遂げたか、それらの作品の文學値はどうか等の問題に亙りたい。」

この書を見ると著者のこの言葉のすべての部分が、實際の資料に就て細かに實行されてゐる。そして換言すれば次のやうになる。先づ第一段が、義經傳説に關するあらゆる資料の書誌學的な記述(主として序篇第二部)。次に第二段として傳説學的な研究(主として、本篇第一部。殊に第二章に、すべての義經傳説が集められ、内容・田處・型式・成分・性質・本據・解釋・成長・影響・文學等の要項に分つての詳細な研究がある)。こゝで史實と傳説との間の關係が明かにされてゐる。最後に第三段として義經文學の研究(本篇第二部。この部には、先づ全作品の概観があり、次に「義經傳説の集成」としての「義經記」及び「義經傳説の凝成」としての「安宅」と「勸進帳」の研究があり、重くこの書の終りを占めてゐる)。こゝに到つて傳説が如何にして文學となつたか、明かにされてゐるのである。

以上は單に構成だけの紹介に過ぎないが、この書は對象に對するあらゆる視角・論點を盡し、文獻學的研究と傳説學的乃至文學的研究とをしっかりと組合せて、すぐれた體系的研究をなし遂げてゐる。(東京・明治書院發行、定價參圓七拾錢)

(笹月清美)